

---

# 未来へ

亜紅亜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来へ

### 【コード】

N3008Y

### 【作者名】

亜紅亜

### 【あらすじ】

組織との対決も終え、無事に復学した新一。  
その新一の身に異変が・・・

## 二話

それは突然だった。

いつものように寝坊して、蘭が起こしに来て……学校へ行って茶化されて。

そんな日常がこれからも続いていくのだと思っていた。

でも

そんな時でも、俺の未来は音を立ててガラガラと崩れていったんだ。

～体育中～

今日は俺の得意なサッカーだ。

いつもは楽しくてしょうがないけれど、今日は何かが違う。

体全体がだるいのか、一歩踏み出すのがすごく疲れる。

軽い眩暈までしてきた。

(こりゃ～昨日遅くまで小説読んでたからか……ははは)

そう。昨日は優作の新刊の発売日であった。  
一度読み出したらとまらなくなってしまい、寝たのは今日の4時である。

(でもおかしいな……。いつもは寝てなくてもサッカーやってたんだけどなあ……)

なんてことをのんきに考えながら居るとどこからか鋭い声が聞こえてきた。

「工藤！……後ろ！……！」

「え？」

サッカーボールだ。

誰かが変な方向に飛ばしちまったのか、と思いながらとめようと体を動かし

動かなかった

そして意外に威力の入ったボールが新一の後頭部に直撃した。  
そして俺はそのまま、崩れ落ちた。

「工藤!!!?!?!」

「つてええ〜」  
崩れ落ち方が派手だった分、心配も大きかったが本人は普通に起き上がる。

「……なんだよ。大丈夫そうじゃんか」  
新一の様子を見て安心したようだ。

「でも珍しいよな。工藤がボール受け損なうなんて。  
いつも難なくやってんのによ」

「あ……ああ。  
そうなんだよな〜。今日はなんだかつ?!」  
その時だ。

右のこめかみから、左のこめかみへ激痛が走った。

「く……工藤?」

「くつ……つ……う」

その間も激痛が走っていた。

(・・・なんだ？この痛み・・・。唯の頭痛じゃないみたいだ・・・)

「おい！中道！職員室に行つて救急車を呼んできてもらつてくれ！」  
あまりにも痛がる新一をみて、教師が指示したのだ。

「おい！しっかりしろ！」

「救急車呼んだからな！」

「工藤！」

そんな声を聞きながら、新一の瞼は閉じられていった。

## 二話（後書き）

．．．．すいません！文章構成下手ですみません！！！！  
頭の中ではこのとーりに新一たちが動いてるんですけどね．．．．  
^：^

いつも頭の中は「ミニ・劇場」ですねw  
そのまま文章に出来たらいいのに．．．．  
文字にするって難しいですね><

コメントお願いします

## 一話

神様は不平等だ。

だって新一は世のために命をかけて巨大な組織と戦ったんだよ？  
何日も生死の境を行ったりきたりして……

それにいつだって事件を解いてる。

一年前、居なくなる前は遊び半分なおこるもあった。  
でも今は違う。

どんなに小さな事件でも大きな事件でも、ことの大きさは一緒だつて。

命の重さに変わりはないって。

言ってたんだよ？

それに、いつも私を気遣ってくれる。

優しい言葉、かけてくれる。

ちよつとしたことにも気がついて……

神様お願い



新—を奪わないで

## 一話（後書き）

初連載小説です！

文章も下手ですし、意味不明なところのほづが多いかもしれません

^^;

ですが温かい目で読んでくださると嬉しいですよ^^

### 三話（前書き）

・・・一話と二話逆になってしまいました><  
申し訳ありません・・・：  
読みにくいかもしれませんが耐えてください！え

### 三話

シンイチガタオレテレビヨウインニハンソウサレタ？

・・・嘘だ

サッカーなんてあいつの得意科目じゃない  
それなのにどうして・・・？

そんな考えを巡らせながら私は学校を飛び出していた

（数十分前）

科目は保健体育

男子はサッカー

女子は保健だった

蘭たちは教室を移動していた

たわいもない話をしながら

「そうそう、蘭。駅前に評判のいいクレープ屋が出来たのよ！  
学校帰りにでも行かない？」

「園子って情報が早いんだから。」

うーん今日は無理かも……。新一の家寄らなきゃいけないし」

「そっかー残念」

なんて話しているときだった

「え？救急車？」

「誰が運ばれたの?!」

「校庭で男子だから・・・うちのクラスじゃん!!!」

「えーマジ?!」

そんな会話が耳に入った

え？運ばれた？

でも今日はあまり日が出てないから熱中症はない  
風邪気味や体調が悪そうなのはいなか・・・った・・・？

そのとき朝のことがよみがえった

だるそうにしてた

無理に笑っていた

もしかしたら・・・新一が？

そのとき、一番聞きたくない言葉が、耳に入った

「工藤君が倒れて病院に搬送された」

### 三話（後書き）

・・・さてさて

次話は病院でのことです！

勘の良い方は気付くかには・・・？  
W

## 四話

気付いたときには病院に居た

あの時そのまま学校を飛び出し、走ってきたみたいだ

通りかかった看護師に声をかけ、連れて行ってもらった

工藤新一様

病室につけられた名前が新一が居ることを示している

「新一・・・起きてるかな」

そつつぶやいてドアに手をかけた

ガララ・・・

「新一？起きてる？」

「？蘭。学校じゃねーのか??」

新一は点滴をしているだけだった

「・・・結構元気そうじゃない。運ばれたって言うからもっと重症かと思った・・・」



「ああ、睡眠不足と栄養不足と脱水症状とからしいからな」

「え？睡眠不足は分かるけど・・・栄養不足って」

その瞬間新一は顔を引きつらせた

「え・・・いや・・・ほら！最近事件があつたから！そのまま寝ちやつたりとかー」

「寝ちやつたりとかーじゃないわよ！人がどれだけ心配したと思つてんの?!?!?!」

そのままいい合いが続いたが、最後はふたりで笑いあつた

そのときは二人とも知らなかつたのだ

薄いドアの前に、  
真実を告げるものが居る事を

#### 四話（後書き）

お久しぶりです（””）

期末テストの関係でなかなか更新できませんでした  
もーテストの馬鹿（ノ、ノ）（呪）

## 五話

ガラララ

医「ああ工藤君。お友達かね？」

すまんが検査結果と今後について話したいのだが……」

蘭「今後って……。」

新一、そんなに悪いんですか?!」

医者の意味ありげな言葉に、蘭は不安を覚えた

医「なあに。心配は要らないよ。」

ただ少し説教をするだけだね……。栄養不足なんかでまた来られちゃたまないから」

新「ははは……すみません

ってことで蘭。もう帰って良いぞ。心配かけたな……。」

蘭「ううん。」

でも検査結果。教えてよね!

じゃあバイバイ!」

ガラララ……

新「……で？」

医「では？」

新「唯の説教なんかではないんでしょう？」

僕達の話も外で聞いていたみたいだし？」

医「はは……さすが高校生探偵。

敵わないな」

新「誤魔化さないでください」

新一の目はもう笑っていないかった

その目は医者を見据えていた

医「では単刀直入に言おう」



「君の目は失明する可能性がある」

目の前が真っ暗になった



## 五話（後書き）

・・・はい

意味不明ですね。（、、1111）

わかってます！^^^；

その理由も変ですが、温かい目をお願いします（、、\*）（、、  
\*）（、、\*）（、、\*）

## 六話（前書き）

矛盾している点もあるかもしれませんがお許しください。  
（、、  
1111）

## 六話

「キミノメハシツメイシルカノウセイガアル

新「その・・・可能性とは？」

もう何がなんだか分からなかった

ただ、平静を装おうとしている自分がいることしか

医「君はA P O T X 4 8 6 9を飲んだことがあるね。

その成分が今になって脳細胞を破壊し始めているんだよ」

新「脳細胞を・・・破壊・・・？」

何故今になって

解毒剤は完璧だったんではないのか

医「その破壊のせいで目につながっている大事な神経が傷つけられるかもしれないんだ」

新「その可能性を下げる方法などは無いんですか」

あつて欲しい

少しの希望をかけて聞いた

医「残念だが・・・」。

今の医療では不可能だ」

ひゅっ

開いていた窓から風が吹いた  
まるで俺の頭を抜けるように  
それほど何も考えられなかった

考えたくなかった

もう、何も見えなくなる

もう、蘭の笑顔を見られない

もう、景色も小説も園子も両親も、サッカー中継、暗号なにもかも

大好きな蘭さえ

二度と見ることは許されなくなる

そんなこと



ソ  
ン  
ナ  
コ  
ト  
ラ  
ン  
ニ  
ハ  
ナ  
セ  
ナ  
イ

六話（後書き）

脳細胞破壊で失明って・・・無いですよね（||。||。||。||）

すいません

医療知識ZEROなんで^^^:



## 七話

医者が出ていた俺の病室には、開いた窓から夕焼けの光が差し込んでいた

その光に当たりながら、俺の頭の中は医者のことになったことがリフレインしていた

「君の目は失明する可能性がある

「今の段階で治療法はない

「ただ、治療法が見つかるまで通院しながら生活してもらってもいい  
「親御さんや、大切な人に・・・話しておきなさい

「ハハ・・・」

俺の乾いた声が病室にこだました

「なんで

「ちくしょう・・・」

「なんで・・・

「ちくしょう・・・」

「なんで・・・!!!!!

「ちくしょおおおお!!!!!!!」

何故、また蘭を悲しめる。苦しめる。  
何故、また縛り付ける。もう開放してやってもいいじゃないのか！  
それに……

何故、灰原をまた孤独に追いやる

あいつは優しい

だから、自分のせいにして知らぬ間に自分を追い詰め苦しめる  
そして、知らずに孤独のふちに立っている

こんなこと、どう伝えるって言っただ

母さんだって、父さんだって、迷惑をかける

蘭も重いものを持たせてしまう

灰原を孤独に追いやってしまう

クラスの皆にも、心配をかける

それに、俺の頭にボールあてたの……後藤だっけな

今、すっげービクビクしてんのかなー……

わりいことしたな

あ  
・  
・  
・  
・

俺、逃げてんのかな

真実から目をそらそうとしてる

だめだな・・・探偵なのに

探偵・・・？

服部にも言わなきゃ・・・



コ  
ン  
コ  
ン

病室のドアが叩かれた

「どろろ」

誰だ？





「工藤！大丈夫かー？」

「ごめんな、工藤君。いきなり来てもーて」

「新一、あのね事務所に来ててお見舞い行ってくって言うてから・・・  
つれてきちゃった」

俺、  
今

最悪

「新  
—  
·  
·  
·  
·  
?」

どんな顔してんのかな

「おい、工藤。顔真っ青やぞ？どうしたんか？」



ー  
ど  
じ  
も  
し  
ね  
え  
よ

そう、笑って返したかった

でも、もうそれは許されない

## 八話

「なんでも・・・ねえよ」

笑って言いたかった

こんな、無理やりの引きつった笑顔じゃなくて

「あほ抜かせ！そんな青い顔しとって大丈夫なわけあらへんがな！」

「新一、どうかしたの？気持ち悪い？」

どうしよう

こいつらにもう話してしまおうか

きつと受け入れて、一番に気にかけてくれるかもしれない

でも

いつも通り、笑い合う事は出来ない

いつも通りの関係には戻れない

俺の事で無駄に気を使わせる

そんなのは絶対に嫌だ

俺の事で無理に笑う姿なんて見たくない



だから――

「なんでもねえって  
寒くなってきたから。そんだけ」

俺は無理にでも笑う  
嘘をつく

「ほんまかあ？

寒いっていうより、青白いって感じやけど・・・」

・・・なんでこいつ、来たんだよ。ばれちまうじゃねーか

「工藤君がなんでもないゆうんならええんちゃう？  
問い詰めることもないやろ」

「そうだね。新一、本当になんでもないんだよね？」

「ああ。心配すんな！」

そう言いながらもこめかみに鋭い物で刺されるような激痛が走った  
思わず顔をしかめた

「・・・俺は納得せえへんのやけど・・・  
まあええか」

(今度しつこく問い詰めてやる・・・覚悟しとけやあ)

平次の周りに漂うオーラに3人は引いていた

「へ・・・平次？どうかしたん？」

「ん？なーんもせえへんよ。」

あつ！そーいえばのどか沸いてきたなー。ねーちゃんと和葉で買  
つてきてくれんか？」

和葉達は飲み物を買いに病室を出て行った

「もうええで」

「？何が」

「強がんな。ポケエ。頭、痛いんやろ。我慢してんのばればれやで」

「……やっぱばれてたか……。」

「ばればれやで。」

「……なにもきかねーのか」

「聞いても答えんやろ」

「は……流石だな」

「……でも一つだけ聞いておくわ。」

「お前、病気なんか？」

「おじいちゃん」

「・・・さよけ。」

俺先帰つとくわ、和葉たちにもそーいっといてや」

「ああ。悪かったな」

プロ  
ジャン  
ツ

病室のドアを閉める音。  
服部が出て行く音がした





、違つ、と言つた声  
自分でもビックリするぐらい、  
かすかに

震えていた

服部は気付いてんだろうな



俺が退院するまで、あと2日

八話（後書き）

関西弁、難しいですねー。  
（、、一一一）

## 九話

あっという間に2日間が過ぎ、退院の日

「じゃあ、週に1度の通院は忘れずに。どうしても来られない日が出来たら連絡をしてくれよ」

「はい。ありがとうございます」

医師との軽い会話を済ませ、急ぎ足で病院を出た。

すぐに外の空気を吸いたかった  
大きな空を見たかった

「  
っ」

見えたのは雲ひとつ無い青空  
その青は怒り、欲望、殺人などと俺の中にあるものが含まれていないような青だった

俺は一体いつまでこの空を見られるのだろうか

一年？三年？もっと短いかもしれない

思わず熱いものがこみ上げてきた  
そのとき

「新一〜〜〜！」

振り向いたら蘭がいた  
しかも服部を連れて

「・・・おねーらどうしたんだよ  
学校は？」

「やだ、新一。  
もう冬休みよ？昨日から」

「あ・・・」

俺のいない間にもう冬休みになっていたのだ  
クラスに顔も出せないで終わったな

「蘭は分かったけど・・・服部と和葉ちゃんは？」

「一昨日帰って昨日夕方に来たの」

あいた口がふさがらなかった

「ちゅーわけや。工藤。今日とめてやー」

「は?? 蘭の家じゃないのか?」

「あほ抜かせ。毛利のねーちゃんに悪いやろ。」

それにお前に聞きたいこともぎょーさんあんねや」

「・・・まあーいいけどよ」

話しながら帰っているうちに工藤低についた  
俺は安心したのか鍵を開けると

眩暈を起こし

その場にうずくまった

幸い蘭や和葉ちゃんは別れた後だった

「工藤?! 大丈夫か?!」



「っ…ああ。わりいな」

もうこいつには嘘は通じない  
そう思うと同時に話す覚悟を決めた

「…全部、話すよ」

平時の顔が引き締まったように見えた

「ああ…」

ソファーについた途端、俺は意識を失い眠りについた  
起きたときはきつと夜中だろう  
夜中でも平次は起きているだろう

تونس

長い夜が始まる

九話（後書き）

最後のせりふ、入れたかっただけです¥¥¥¥¥¥¥¥あは

## 十話

「な・・・んやて」

服部の驚いた声が木霊した

意識を失ってから、2時間ほどして目を覚ましたら前に服部がいた  
それから俺の身に起きる事を話した

「そんなの・・・嘘やろ」

「嘘じゃねえよ」

ほら、余計な心配をさせ困惑させる

やっぱり言わないほうが良かったのだ

などと思ったとき

「工藤。苦しかったやろ・・・」

「?!」

「そないな事一人で抱えてたんや。辛いやろ

それにお前は、こんなこと話さないほうが良いんじゃないか、と  
考えてるんやろうしな!」

「うっせ」

「まあ、ちいとびっくりしたけど、100%治らんわけやないんや  
ろ?」

「だつたら大丈夫や！」

「……ああ。服部はこういう奴だったな  
どんな最悪な状況でも、どんなに汚れているところでもいいところ  
を見つけそれをさらに輝かせる

すごい奴だな

こんな奴が俺の傍にいたのに、今まで気付かなかった

「……そういうことが」

「なにがや？」

きつと蘭も、服部と同じなんだ

少しの可能性を信じて待つていてくれる

コナンのとき、なんだかんだ言っても待つていてくれたのは俺を信  
じてくれてたんだよな

「……いまさらになって改めて分かるって、笑えるよな

俺の周りの奴は……皆強い

強くて頼れる

ありがたいな

「オメーらは強いな」

「あん？なにがや、剣道かー？」

「ちげーよ……まあそれもだけど」

「明日、灰原にも言いに行くよ。博士にも」

「え」

「着いてきてくれるか？」

「ああ」





俺は工藤の強い眼差しに目を逸らしそうになった

今までは工藤が俺たちに目を合わせなかったのに

今度は俺か・・・

あのちっこいねーちゃんはどう思うやろか

びっくりするやろか

工藤もそれ承知やろうに・・・

それも受け止める強さがあんねや

工藤

俺らより、お前のほうが強いぞ

十話（後書き）

あ（＊＾　　＾＊）

最後意味ぷーちゃん。・・・＊・・。（。○。○）  
）  
||  
、  
、＊  
（○

## 十一話

「……じゃ、行くか」

「おう」

新一の声を合図として二人は阿笠邸へと足を踏み入れた

「おい博士」

「じゃますんでー」

「……あなた達チャイムも押さずに勝手に入ってくるの止めなさいよ」

「ああわりいわりい。それより灰原、時間あつか？」

「構わないけど……なに？恋愛相談ならお断りよ」

「んなことじゃねーよ。出来れば……博士も一緒に」

「……分かったわ。座って待ってて。お茶でも入れてくるわ」

灰原は何かを察したように新一らを座るよう促した

(彼、何かを決意したような感じだった。蘭さん関係でもない。じやあ……もしかして……)

灰原は一つの最悪な可能性を思い、お茶を入れる手がかすかに震えだした

(そんな……まさか)

お茶を持っていくと博士も来ていた

「なんじゃ？話って」

「ああ……ちょっと伝えなきゃならないことがあってよ」

「伝えなきゃならんこと？」

「ああ」

「俺は

失明するかもしれない」

二人、灰原と博士は目を見開き驚いていた  
服部はたとえ一度聞いたとしても、理解していたとしても再び事実  
を耳にし、苦痛な顔をしていた

少しの沈黙があった

「どういう……ことなの」

その沈黙を破ったのは灰原だった

「どういうことも、何もねえよ。俺は失明するかもしれない。そん  
だけ」

「そんだけって!!!!あなた自分の状況分かってるの?!?!」

「ああ」

「つ……。どうせAPOTXN4869の解毒剤のせいでしょう？」

「ああ。脳細胞が破壊されてるらしい。その破壊で目へつながらる神  
経を傷つけてるみてーだ」



「・・・なさいよ」

「え？」

「私を責めなさいよ！あんな毒薬を作った張本人なのよ？！あんな薬さえなければあなたはこんな思いなんて・・・！私に会うことも無く、平和に今まで通りに暮らせてたのに！！！」

何故。彼は穏やかな目をしてるの？

まるで死期をまつ老人みたいに

私が憎くないの？恨んでないの？

蘭さんとの時間も奪った、勝手に、死んだ、とか言われて・・・

そんな時を作ったのも私なのにー・・・

「灰原！！！！」

「！」

工藤君の大きな声

私の叫びを一瞬で制した

「ああ、俺はお前が憎かった。腹が立って腹が立ってしょうがなかった」

ほら、どんなに外見を装っても内心は私に対する怒りでー

「でも、今は違う」

「・・・え？」

「お前がああ薬を作ってくれたおかげで俺は生きてる。薬が無かつたら俺は拳銃でも殺されてかかも しんねーしな」

へへっと工藤君は笑った

「それに俺が縮まなかつたら歩美達にも会えなかつたしな！」

「コナンになって俺は成長した。人間としても、探偵としても」

「おめーがいてくれてよかったよ」

「おめーの作った薬で俺は助かったんだ」

「ありがとな」

なんで彼は・・・

こんなに優しい言葉をかけてくれるの・・・？

私は・・・彼の人生を狂わせたのに

「ありがとう」

この言葉を工藤君は私に言ってくれた

こんな真っ黒な私に

「っ……っ……！う……くっ……」

私は泣いた

この涙は悲しみなのか、嬉しさなのか分からない

でも涙を流していくうちに心が軽く

今まで溜め込んでいた黒いものが出て行く気がした

「頼まれなくても私からお願いするわよ。嫌がっても止めてあげないんだから……」

3人（こ…怖っ！…！）

「工藤良かつたなぐちっこいねーちゃん。頼み聞いてくれて」

「…良くねえよ」

「は？」

「蘭たち。どーすっかな」

「あ…なるほど」

「ま。明日考えるか。今日はもう寝る」

「せやな」

二人の影は工藤邸に消えていった

十一話(後書き)

っは~~~~~。。。。。- y ) > 。 ( > ) 。 〇〇

コメントお願いします ^ ^

## 十二話

トントントン

「なあ…服部。眠れたか」

「いや。熟睡できんかったわ」

「やっぱり言えねえよ。…失明するかも、なんてな」

「ほんまや」

そう話しながら階段を下りてきたのは平次と新一だ  
今は朝の8時、起きて来て朝食でも食べようかと…

「ねえ…どじいじいこと」

「ちゃんと説明しいよ」

いるはずの無い人の声があった  
ここにいるはずが無い  
そう自分に言った。でも

そこにいるのは

蘭と和葉だ

「なんでここに…」

「工藤君と平次だけじゃどうせちゃんとしたもの食べへんからって、蘭ちゃんが朝ごはん作りに来てくれたんよ！」

和葉はなぜか怒り口調だ

「って和葉。お前なに怒ってんねん」

「当たり前やる！理由はわからへんけど、そないな大切なこと蘭ちゃんに黙ってたん？！

おかしいやる！」

「和葉！工藤はな」もういいよ。服部」

新一が平次の言葉を制した

その顔は何かをあきらめたような、決意したような顔だった

「…説明するよ。少し長くなるけど」

蘭と和葉はうなずいた

新一はすべて話した

医師に話されたこと、すべて

二人は困惑していた

その後平次が気を利かせてか、和葉を連れて出て行った

「見えなくなるの？」

「…ああ」



「ばか」

「え？」

「ばかばかばかばかばか！！！！  
治る可能性もあるって言ったじゃない！  
なんで治るって言うてくれないの！なんで新一がその可能性を信じないの？！」

「その可能性だって、低いんだぜ？  
それを…どう信じろって言うんだよ」

新一が出した笑みは自虐的な笑みだった

「もう…なにもかも限界なんだよっ…！」

そっついい新一の頬をつたつたのは涙だった

人前で涙を見せなかった新一が、初めてみせた涙だった

## 十三話（前書き）

新一泣きましたね（――；）  
泣き新一・コナン好きなんですよ（><y  
クール…でもわぁ 見たいなwww

## 十三話

「し…んいち…？」

「っわっわりい…ちよつとな、ごみ入っただけだから…」

嘘だ

そんなのは嘘だった

いつも頑張ってポーカーフェイスを保っていたけど、もう限界だった

この涙は本心だ

泣きたかった

泣いて、その涙と一緒に心の蟠りも流れ出ていくような気がして…

服部がいたから泣かないようにしていたけど…

なんで一番見せたくない奴に、見られちまうんだろうな

きつと自分のことのように心配して抱え込むのに…

こんな甘えちゃいけないのに

「へたくそだなあ」

「は？」

「泣いた言い訳。へたくそ！」

「いや、いいわけも何も……」

「甘えていいのに。寄りかかって欲しいのに。」

新一は全部一人で背負い込んだじゃうからなあー」

「……そうしたらおめーは苦しむじゃねーか

泣くじゃねーか……。そんな姿はもう見たくないんだよ……!!

俺のことなんかで苦しんで、泣いて、傷ついて……もう、同じ過ちは  
しないって決めたのに……!!」

「話してくれないほうが苦しかった」

その言葉に新一は下を向いていた顔を蘭に向けた

「新一、自覚してた？」

あんた何か隠し事あると、無理にポーカークォフェイスだからすぐ分かるのよ？」

「あ……」

「それに、今度は一人じゃないもん」

「一人じゃない…?」

「コナン君になったときは心細い感じがしたけど、今は新一、ちゃんというじゃない」

「…」

「それに服部君だって、和葉ちゃんだって。あたしは平気だよ？」

「失明したらどうすんだよ」

新一にとって一番恐れていたことだった

「そしたらあたしが新一の目になる」

「もっ心配要らないから…笑って？」

「新一がどうなってもあたしは新一から離れないから！」

そういうと蘭はひまわりのように笑った

それにつられて、俺も、笑った



## 十四話（前書き）

今回は新一と蘭を置いてどこかへ行った平次たちのお話です  
> < y )

## 十四話

「ちょっとはなしいや!」

和葉の手は平次に強くつかまれ、引っ張られたので少し赤くなっている

「なんで連れ出したん? あたし、工藤君に言いたいことあんのやけど」

「なにを言っんや」

「そんなの、蘭ちゃんに隠してたことに決まってるやんか! コナン君の時はしゃあないとして、今回は言えたやろ!!!」

「...お前は何も分かってへんのや」

急に平次の声のトーンが低くなった  
さすがの和葉も口を閉じた

「工藤は理由も無しにあのねーちゃんに隠し事なんてせえへん。それはお前もよく分かってるやろ」

和葉は本当のことで何も言えなかった

「工藤は苦しんどった。隠し事もしたくないし、でも言わないわけにはいかない」

あのねーちゃんが好きやから…よけい、言えんかったんや」

「…そんなくらい、分かってたよ」

和葉の目からは涙が出た

「そんなん…とつくに分かってたよ。工藤君は平次と違って蘭ちゃんのこと、本当に大切にしているから。余計つらいのも…分かってたよ…！」

平次は複雑な気持ちだった

和葉が素直になっているのはいい

でも

、工藤君と違って、ってなんやねん！

俺はお前のこと大切にしていって言いたいんか！！！！

と、言いたかったが飲み込んで我慢我慢…と言いつけさせ

「ほならなんであんなおこっとなんや？」

「っだつて…工藤君との会話聞いたとき、蘭ちゃんすっごくシヨック受けたような顔しててん。

なのに…笑顔で、無理に作った笑顔で、大丈夫、っていったんやであんな蘭ちゃんの顔なんて、うち…もう見たくないねん！！！！」

「んなの工藤も一緒や！！」

「…もう涙全部出たか？」

「うん！すっきりした！！」

「ほんなら工藤ん家戻ろっか！」

そうして、新一の家のドアの前  
ノブに手を伸ばした瞬間聞こえてきたのは

新一の泣き

平次と和葉は息を呑んだ  
あの新一が泣くなんて

悪いと思いつつながらドアに耳をくつつけ聞いていた  
新一の本音も、なにもかも聞こえてしまった  
今すぐ入って、無理すんな！、などと声をかけたかった

でも

その必要は無い



すぐに二人の笑い声が聞こえたのだから――――

十四話（後書き）

コメントをお願いします）”  
（”

## 十五話

蘭たちに本当のことを話してからはとても気が楽になった  
隠し事もせずに、蘭もいつも通り接してくれている

……表面上では

きつと蘭は無理している

少しだけでも。でも

蘭が笑っているから、話さないから俺は聞かない  
無理に話しても蘭が苦しいだけだから

そう

笑い合って

いつもどおりに生活して

蘭の作ったご飯を食べて

もうなにも無かったように思えてきた

失明なんてー忘れている

しかし

現実に引き戻された

書齋で学校から出された課題でもやるうと思った  
ドアを開け、足を無味だした瞬間――――

目の前が一瞬真っ暗になった

治まり、足元を見たら、'ヤバイ'と感じた

なぜが

足の下にはおきっぱなしの本  
出した足を止められる訳も無く、見事に転んだ

「いってー…」

一瞬目の前が暗くなったのは、進行しているからだと分かる  
しかし、転んで頭をぶつけた時の暗くなったのは何なんだ

転び、寝そべった体勢になっているのも気にせず考えた

たどり着いた先は

「あ。転んで頭ぶつけたからだ」

名探偵もたまにはぼけるのである



定期健診で病院へ訪れた新一は目の前が暗くなったのが悪い方向へ  
進んでいることを知る

もう本当の悪い方向へ



十五話（後書き）

次回は哀登場です！！！！／＼。、。（）ノ

## 十六話

カチカチカチ……

ある家の地下室では一人の少女が休むことなくパソコンのキーを叩いていた

その見た目からは想像も出来ない、難しい資料を見ながら

（早くしなきゃ…工藤君が…）

一心不乱にキーを叩いていた哀。

博士がそんな哀を気遣い、あつたかいココアを持って部屋に入ってきたのも気付かなかった

「哀くん」

「！…！…博士」

「そんなに頑張っていたら体がもたんぞ？」

「私はいいのよ…。それより工藤君を…」「哀くん！…！」

哀は博士に言葉を遮られた

「哀くんはもう、わしの娘のようじゃと思っている。

娘同然の哀くんが毎日、こもりっぱなしでいると心配するに決まっ  
ておるじゃらじつ?」

「むす…め…?」

「そうじゃ。新一も、そんなになるまで哀くんに頼もつとは思って  
らんとおもつぞ?」

哀は博士の言葉に心をうたれた

いつも心のどこかで自分は必要ないんじゃ、と考えていた

それなのに、こんなに大切な人から言っただけ欲しかった言葉を貰った

こんなに嬉しいことは無い

「…わかったわ。もう無理はやめる」

「哀くん！」

「でも、今日は少し無理をするわ」

「え？」

「今、一つの可能性を思いついたわ。もしかしたら…いけるかも」

## 十七話

「…暇だ」

洋館に響いた声の主はソファに座っている工藤新一

今は朝の8時。新一にしては珍しくの早起きだ

いつもならば蘭が起こしに來なければいつまでも寝ていられる  
しかし今日は熟睡でき、蘭が來なくても起きられたのだ

（蘭が来るのは夕飯を作るために夕方。今日は検診だけどその検診  
は午後1時。今は8時だから…）

「…5時間もあんじゃねえか」

検診に遅れないように推理小説は読むことは避けたい。寝ようにも  
今日は眠れない…。熟睡したから

「暇だあああああ！」



周りに変化がおきた  
ざわざわと人々が騒ぐ  
その視線の先には一台の車。運転手は眠っている

## 居眠り運転

いつもの新一ならいち早く異変に気付き、周りの人々を避難させるであろう

しかし

今の新一にはそれが出来なかった  
前触れも無く襲ってくる目の前が真っ暗になる症状。日差しによる  
眠気

最悪の状況だった



周囲の人があせり始める

何故、あの人は動かないのか

早く。早くこっちに来ないと、轢かれてしまう！

その思いが届いたのか新一も状況を理解した

しかし、遅かった



目に映ったのは新一が車に撥ね飛ばされ地面に叩きつけられる光景  
だった

十七話（後書き）

久しぶりの更新です（\*^ ^\*）

風邪引きました><：



んが居眠り運転の車にはねられ重症です。意識もなく、危ない状態との情報も入っています」「

「え…」

「うそ…！新一君が？」

「新一が…事故？」

「ら…蘭。新一君なら大丈夫よ。きっとそんなに怪我も思っほどひどくないんじゃない…」

「違うの」

顔を青ざめ、蘭が言った

「新一が重症なのは心配だけど…きっと新一なら大丈夫。でも、いつも周りの変化にいち早く気付く新一が、車に気付かなかった…。そんなになるまで悪化してるのかも…」

「！」

園子は息を呑んだ  
言われて見れば確かにそうだ。あの新一が気付かなかった…  
そんなこと……

動くことも出来ないくらいに動揺した蘭を横目に園子は携帯を取り  
出した

電話をかけた先は――――

鈴木財閥



「あ。パパ？新一君のニュース見た？うん。それで、どこの病院に搬送されたかわかる？」

米花中央病院？分かった。ありがとう！」

「蘭！新一君米花中央病院にいるって。タクシー捕まえていくわよ……！」

蘭が何か言うのを聞かず、園子は蘭の手をとり走り出した

## 十九話

何故、彼がこんなに苦しまなきゃいけないの

何も悪いことしてないでしょう？

何で貴方は、こんな所に、入っているの

出てきてよ…早く……出てきて!!

願っても、想っても、彼のいる部屋も、私も私の周りも何も変わらない



数時間の手術を終え、赤いランプが消えた  
それが合図のように一斉に立ち上がる

手術室から出てきた医師に蘭が寄る

「先生！新一は…！」

「何しろ頭部からの出血がひどく…」

目の前が真っ暗になる

気持ち悪い。吐き気がする

まさか…

まさか————

「ご安心ください。無事、一命は取り留めました。  
…しかし頭部からの出血がひどく…。もしかしたらこのまま目を覚  
まさないこともあるかもしれせん」

「え…。それって…」

「はい。覚悟もしておいたほうがよろしいかと」

そう言うと医師は一礼をし、その場を去っていった

## 二十話

新一の容態は安定し、個室の病室になった  
面会も許可され、私はずっと新一についている

目を覚ますことの無い彼。少しも瞼が動くことも無い  
包帯が巻かれる中で、新一が生きていることを証明するもの…

それは、規則正しくされる呼吸

リズムが崩れることも無くされる

…とても穏やかだ

たまにはいいのかな、と想着てしまう

前は事件が起こると睡眠時間を削ってまで、調べる  
寝不足になっても、真実を追うことをやめない

今まで寝られなかった分寝てよね？

心でそう言う。言葉が返ってくる訳も無いが…

つい、呼びかける

「昨日、お父さんがヨロコちゃん！って言ってテレビ見ながら椅子から転げ落ちたんだよ。もう呆れちゃうよね」

「園子がね京極さんとなかなか会えないって言ってた。…あたし会いたいって言っても新一に会えなかったから…」。

園子は幸せよね」

「新一。おば様が電話で言ってたよ。新ちゃんは蘭ちゃんを見捨てたりはしないって。見捨てないですよ？」

面白おかしく話す蘭

たとえ返事が無くても、新一に届いていれば良かった  
どこかで感じ取ってくれば良かった

蘭がいる事。いつまでも一緒という事を





新一が事故にあっってからもう一週間は経つ

医師からはもう目覚めなくてもおかしくは無いと告げられていた

それを聞き、驚き戸惑う人の中で蘭だけはこういった

「新一は今までちゃんと寝れていなかった分を寝ているだけです。体力も、メンタルも人一倍あるから目覚めないなんてことありませんよ。どんなに時が経過してもきつともう一度笑顔を見せてくれる。そう信じています」

そして、笑った

新一に向けられる笑顔で

新一の手を握りながら



その手は今もつながれている

手をつなぎながら今日も蘭の話を聞いている

「新一、もう体力は戻った？…きっと戻ってるよね。  
新一が目覚めないのは、自分のせいで周りの人が悲しんだりするの  
が嫌なんだよね。きっと」

「頭では起きなきゃいけないっていうの、分かってるよね。でも心  
が嫌がつてるんだね」

話しかけてもやはり反応しない  
しかし、蘭は新一が聞いているように話しかけた

「誰も迷惑なんて思ってないから。早く…貴方のステキな笑顔を皆に見せて？」

そうしたら、皆安心するよ」

手をいつもより強く握り、自分の額に祈るようにくつつけた

「…っ…新一い…もう起きてよお………」

蘭の目から流れる涙

もう限界だった

新一を信じていた。起きてくれると  
しかし、とても不安だった

取り残されたようで

また、新一は一人でどこかへいってしまっくんじゃないか  
また、私は一人…？

不安で不安で不安で… そんな闇に飲まれそうで、必死に笑顔を作り  
何でも無いふりをしていた

でももう限界だ

笑って。私の名前を呼んで

何でも無いよって言って…！

「新一っ…！！！！！！」

流れる涙は止まることを知らない



二十話（後書き）

メリークリスマスゞ（@^ ^@）ノです!!!

さあサンタさんは来たかな？

私のところにはコナンの特大バスタオルと沈黙の15分のゲオ特別仕様のキーホルダーを持ったお父さんが……!

∴コナンキター Y Y Y Y Y Y (。A。)!!!

## 二十一話

流れ続ける涙

その涙が何かでふき取られた

「え……」

「泣く……な……よ」

何かとは新一の指  
握っていた手を動かし、涙を拭ったようだ

「し……新一っ！なんとも無いの？」

「ああ……体のあちこちがいてーけどな……」

「待ってて！先生呼んでくる！」



蘭が戻ってきたと思ったら俺の担当医…おしが一緒に入ってきた  
心臓の音を聞いたりとちよっとした検査をし、出て行った

蘭と二人の病室

話したいことは沢山あった

しかし、互いに口を開くことをなかなかしない

「あの子…蘭」

「…」

「蘭？」

返事が無いので蘭を見てみたら……

寝ている

新一が目を覚まし、そばにいてることで安心したらしい  
よく見ると、かすかに微笑んでいる

「…悪いな。蘭…」

新一は優しく蘭の頭を撫でた



勢いよく入ってきた人物は目暮警部  
その頃には蘭も起きていた

「あ。警部。すみません、ご心配かけました」

「いやいや。無事で何よりだ。

…なんでもないのかね」

「え」

「君が車に気付かなかったなんて…」

一瞬どきりとした

警部の言葉ではない

あのときのことか頭によぎる

そうだ

車が来ていた事なんて分からなかった

だって

車があった時より前の記憶が分からない――――

ただ、真っ暗な世界にいたようなことしか

二十一話(後書き)

うん30くらいで終わりにしたいです。。。。( ) (呪)  
。。。。( ) ( )

## 二十二話

「工藤君、ちょっといいかい？」

「ええ…大丈夫です」

そう言つて病室に入ってきたのは「目」での担当医だった  
何か資料みたいなものを持っているから、手術に関するのかも、と  
いう予想がつく

先生の表情からも、良い、ことではないという事も  
椅子に座つてからも硬い表情で、なかなか喋らない医師

「…先生。全部話してください。覚悟は…出来てますから」

新一の目に迷いは無かった  
映っていたのはどんなことでも受けとめるといふ強さだった

「まったく…。君には敵わないな」

フフッと笑い、口を開いた

「君の今回の事故で、手術は出来そうにない」

「え…」

覚悟はしてると言った

しかし、実際に受け止めてみるとキツイ

「どづいづ…こと…ですか」

口の中が乾いて上手く喋れない

「今回の事故で、君は頭を怪我しただろう。その時の手術で頭を切っている。

もう一度切る事は…リスクが高すぎる。上手くいく可能性はとても低い。」

「上手くいかなかった場合は…どうなるんですか」

「手術失敗という形で死ぬか…失敗でも一命を取り留めたとしても、昏睡状態か…だ」



「そう…ですか」

新一は静かに言った

「他には…何かあるんですか？」

「ん？あぁいや…コレで終わりだよ…。どうしても手術を受けるならそれはまた話すことはあるけれども…」

「そうですね。じゃあ今日はもう良いですか…？ちょっと疲れちゃって…」

「あぁ、構わないよ。まだ時間があるから、ゆっくり考えると良い」

そう言い医師が出て行った

病室には時間が止まったような感じだった

静かな、でも重い空気の中に嗚咽が漏れた

「っ……………どっしってっ…っ……………」

新一はシーツを強く、強く握り締め額を抑えた

「なんで…こんな…」

悔しくて悔しくてしようがなかった

流れた涙を止めなければ  
そう思いとめようとするが、そう思うほど、止まらない

新一は嗚咽を抑えながら泣き続けた

それを、壁を一枚はさんである人物たちが聞いていた

## 二十二話（後書き）

あと少しで今年も終わりですね！

お気に入り、コメント、読んで下さっている皆様。

ほんと~~~~~に！ありがとうございます！！！！

来年もよろしく願いします！！！！（\* ^ ^ \*）

## 二十三話

「よう！ねーちゃん。遊びにきたでー！」

「ちよつと平次！そんな騒いだら迷惑やる！」

一度大坂に帰った和葉と平次が毛利宅にやってきた  
平次は帰らないと言っていたが、和葉により、一時帰ったのだ

「おう。ねーちゃん。今度は、おかんに了解得たから一週間ぐらい  
こっちにおるでー」

「ごめんな、蘭ちゃん。平次がどーしても行くゆーて聞かんで…」

「え？ああ大丈夫よ。布団も人数分あるし…」

蘭は笑い、言っていたが和葉はその笑顔に違和感を感じた  
どこかぎこちなく、元気が無い

「蘭ちゃん…工藤君の容態、よくないん？」

「あ、ううん…。悪くは無と思うんだけどね。ただ…心配で」

「心配？」

「うん…。あたしがいない間に新一が苦しんでたら…どうしよう



蘭たちは新一の好きな推理小説とともに、病院を訪れた

蘭と和葉が他愛も無い話で盛り上がる中、一人、考え事に浸っていた

（工藤が事故…そないなこと考えられへんな。あいつは人一倍、周りに目配つとるし…瞬発力もあるから車を避けるなんて余裕のはず。それができひんかたつてことは…そんなに悪化してるんかな）

平次たちが大坂に帰ってからおきた事故

その時の様子も分からないから考えもすぐにそこを尽きてしまう

「…っ部君。はっと…君。服部君！」

ようやく蘭が自分を呼んでいることに気がついた

「どうしたの？新一の病室あそこ…って、あれ？」

「どうしたん」

「新一の病室から、誰かが出て行って…。担当の先生とかかな？」

「きつとそうやる…さ！はよ行こ！」

和葉に背中を押されながら病室の前に行き、取っ手に手をかけた  
しかし――

ドアの向こうに聞こえる声

それは、新一の嗚咽

大きな声ではないが、響いて耳を澄ませば聞こえる

「っ……どうしてっ！……っ………」

涙を抑えながら、歯を食いしばっているのだろう

その様子が容易に想像できた

その後も気持ちを押さえられることも無いまま、新一は不意に眠ってしまった





## 二十四話(前書き)

あけましておめでとございませう( # ( # ヽ 遅

今年もマイペースに更新していくのでよろしくお願ひしますヾ( @

。 。 @ )ノ

ではでは

## 二十四話

窓の隙間から差し込んでくる光で目を覚ました。  
もう夕焼けが綺麗な時間になってしまった。

…さっきまで太陽が輝いていたのに。

目を開けて飛び込んでくる天井。

もう見慣れてしまった。

起きて周りがいつもより長くぼやけるのにも。慣れてしまった。

そうだ。

あのまま泣き疲れて眠ってしまったのだ。このままじゃ失明を待つだけという現実を受け入れざる終えなくて。

目が可笑しくなってから俺は良く泣くようになった。

…涙腺でも壊れたか……なんてな。

感情が抑えられない。

いつもどうやって抑えてきたか分からない。

いつも何を感じてどうしてきたか……

ここまで弱くなったのか。

自虐的な笑みがこぼれる。

だめだなあ…

駄目だなあ…

ダメダナア…

「駄目だなあ…」

「いい加減にせえよ。ドアホ」

関西弁が耳に入る。

寝ている体勢で横を向くと、蘭・和葉・平次が来ていた。

新一は平次と和葉が来ていることを知らないのだ。

(…あ。新一にメールするの忘れてた)

蘭のミスである。

(…)  
(なんだ。服部たちがいるわけ無いよな。だって大坂にいるんだし…)

「あー。そこまで悪くなつたか……」

「何が悪くなつたんや？」

「幻覚と幻聴が聞こえるまでになったなんて…」

平次が新一の頬をつねる。

「あゝ？誰が幻覚やねん？だ・れ・が！」

「い・で・で・で！冗談だよ。ばなせつで！」

新一がつけられた頬をさする。

「ったく、なんでいんだよ。大坂に帰ったんじゃないのか」

「帰ったで？でもまたきたんや！」

いつまでも言いあいをしている二人に痺れを切らし、和葉と蘭が問  
に入った。



「え…？」

「なんでもっと自分を大切にせんのや！大丈夫ゆうてもお前ボロボロやん！なんでそんなになっても我慢するんや。自分の中で押し殺して…つらいわけないやろ」

まずいと蘭は思った。

このまま平次が喋ったら、新一が泣いているのを聞いていたことまばれてしまう。そしたら…

もう心配かけまいと涙さえ流さなくなってしまう。

「服部君…もうい「だから泣いてたんやろ？」

蘭がとめる声も聞こえず、平次は言ってしまった。

「平次っ！」

和葉が平次を引つ張り耳打ちした。  
和葉は平次が蘭の考えを壊したことに怒っていた。  
今にも殴りかかりそうな勢いである。

「なんだ…聞かれてたか」

穏やかな声で言った。動揺も、怒りも、何も映っていない瞳で穏やかに言った。

「いいよ、遠山さん」

「泣いてた…ねえ。うん……。弱くなったね、俺も。たいしたこと

じゃないのに泣いてね…」

「俺はなんで泣いてたか聞きたいんや！」

新一が少し躊躇したとき、大人びた少女の聞きなれた声が聞こえた。



「その話。私も聞きたいわ」

振り向くと立っていた。小さな科学者。

二十四話（後書き）

和葉とか出したのに…台詞一つって…ごめんなさい…  
蘭も…あんま無かった…。；。。；)  
平次・新一が主ですねー壁ー・)

次は哀中心になります！

## 二十五話

「その話。私も聞きたいわ」

立っていたのは灰原哀。

ドアが開いていた。入ってくる音に4人とも気付かなかった。

「なんで…灰原が…」

驚きを隠せない新一。だって哀が病室に来るなんて考えもしなかったのだから。

アポなしで来る平次と違い、哀は必ず前日に連絡を入れるはず。

…よっぽどのが無い限り、急に来るなんて無い。

「あら。そんなに驚くかしら？勝手に入ったのは悪いけど、ノックをして返ってきたのが色黒名探偵さんの怒鳴り声なんだもの。

何事かと思っちゃって。ま、入っても気付かなかったし、工藤君が泣いたとか…興味深いじゃない？」

「興味深いって…おまえなあ」

「あんな、ねーちゃん。工藤の奴「平次はだまっとなつて……！」

和葉に遮られた平次。

これ以上ややこしくするなとオーラが言っている。

「か……和葉ちゃん……」

哀がフッと笑った。

「悪いけど、私今日は工藤君に用があつてね」

「俺にか？つて……お前目の下隈あんじゃねーか。ちゃんと寝てんのか？」

「あら。どっかの誰かさんのせいで寝不足よ。

お陰でいいものが出来ちゃったけど……だれかさんの欲しいもの」

そう言い、哀がホケットから取り出した薬の入った袋。

新一はそれを見て目を大きく見開いた。

「灰原…それ……………」

「ええ。頼まれていた薬よ。まあ前の子の状態に合わせて作った試作品だから…」

今すぐに服用してわけには行かないけど」

二人の会話に蘭たちはまったくついていけなかった。特に蘭は…動揺を隠せなかった。

新一に頼まれていた薬？

何のこと？

薬って…手術すれば治るんじゃないの？  
薬を必要とするまでになっちゃったの？

疑問がありすぎて、周りの声が遠く聞こえる。

そんな中でも話は進んでいく。

「って言うわけだから…今度外出許可でも取ってきて頂戴。取れなかったら…どうなるか分かってるでしょうね？」

「はい………とります」

「じゃあ私は…」

哀は出て行った。

何を二人が話していたか分からず、新一だけが安堵の様子だった。

「哀ちゃん…かわったよね」

「え？」

蘭が突然言った言葉。

新一は耳を疑った。

「明るくなったって…灰原が？」

「うん。なんていうか…前は、コナン君のときは今より明るくなかった」

わざとコナン君の所を強調して言う。

新一が罰の悪い顔をするのを分かっているから。

そついう弱点を知っているのは私だけとも思いたかった。

…哀ちゃんは明るくなった。

明るいというより…よく分からない。

ただ、明るくなったただけじゃない。

何かが、変わった。

「んで、工藤」

「ん」

「お前、どうなんねや」

「どっちなるってっ」

「言葉のまんまや」



「今は……いえない」

「ひと段落着いたら……言うから。それまで……待ってて。な」

最後の「な」は私に向けられていた気がする。  
名前を呼ばれたわけでも、目が合ったわけでもない。

ただ、感じた。

## 二十六話

「だがっ…それは君を危険にさらすことだ。許可することなんて」

「このままいても僕の治療法は無いですよ。怪我也治ったし…。大丈夫だと思いますけど？」

「しかしもしものことがあつたらーー」

「これ以上。失うものなんてありませんよ。僕はもう、希望しか持つていないんです」

ある一室から聞こえる。

一人の医師と患者の口論。

医師のほうは焦りが見えているが、患者のほうは焦りも何も無い。むしろ”コレが正しいこと”という様に、まっすぐな声だった。

その後も数分口論は続いたが、次に聞こえてきたのは医師の諦めの声だった。

「……分かった。許可しよう。でも通院はしてもらおう」

\*  
\* : : : : : \*  
\* : : : : : \*  
\* : : : : : \*  
\* : : : : : \*

先生の反対を押し切って出てきた病院。

今日の朝から話し始め、昼には荷物をまとめてここにいる。

俺の上には青い空。一度は見たくてしよすがなかった。

自分が籠の中にいるみたいで。

でも今は、籠の中で羽ばたく方法を見つけた。

…限られてはいるが自由だ。

上を向いていた顔を前に向け、歩き出す。

病院を出た足で向かう所。

幼馴染の所、親友のところ、帰るべき場所。

………違う。

俺は詫びなきゃいけない。

迷惑をかけたから。

「…今日サッカー部あつかな」

冬休みも終わりに近づいた。  
しかし部活が休みになることは無かったはず。

そう。

帝丹高校へ。

\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*

「ふっ」

病院から高校へは結構な距離があった。  
体力も少し落ちていたのだろうか。  
動かしていない筋肉が少し痛む。

門をくぐり、一歩一歩踏みしめる。

(…毎日歩いてたのに、今は懐かしいな)

ゆっくりと歩き、職員室へ向かった。

コンコン  
ノックしドアを開ける。

「失礼します」

開けたら目に入ってきた担任。

目を見開き、持っていた書類を落とした。

「く…工藤？」

「先生お久しぶりです。ご迷惑をお掛けしました」

「そんなことはどうでもいい！！工藤、お前大丈夫なのか?!入院してたんだろ?!出てきて良いのか?!?!?!」

と、思い切り体をゆすられる。

ああ思い出した。

俺の担任は騒がしいんだっ…。

せめて行く前に電話でもしておくんだっ…

いまさらながらに後悔する。

「はい。もう退院しました。まだ…完治したわけじゃないんですが」

「完治していない?どういうことだ?」

「…今、大丈夫ですか?出来たら説明したいんですけど」



そのまま俺は職員室に通され、担任と向かい合い、他の先生の視線が刺さるなかゆっくり話し始めた。

「……うそ……だろう?」

やっぱり衝撃奈ことを聞かされたとき、大抵リアクションは変わらないんだな……など呑気に思う。

「嘘じゃないですよ…。このまま行けば僕は失明します。まあ…希望はあるんですが可能性は低いですね」

いつの間にか教師全員が俺たちを取り囲んでいた。

「その場合…工藤はどうするんだ」

「その場合は、退学させていただきます」

「っ?!」

教師達が息を呑む。

確かに新一は学校側に迷惑をかけないようにそれくらいのことを考えているのだろうと思った。

しかし――

退学とは…

「くっ工藤！もう少し考えー」

「申し訳ありませんが、考えを変えるつもりはありません。探偵は目が見えなくても出来ますが、学校生活は、先生方に迷惑をかけるだけです。

でもそれまでは普通に通いますんで…。三学期から来ます。

…もう話すことは全て話したんで。これで失礼します」

教師達はなんとしてでもその考えを曲げなかった。しかし新一の強い眼差しと揺らぎの無い声で、それは無理だと感じた。

ドアに手をかけたとき、新一が言った。

「出来れば皆には、内密にしておいてください。そのうちばねると思いますが、出来る限り普通に接して欲しいんです。でも、先生方が話したほうが言いと言うなら話してもらっても構いません」

失礼します。と礼儀正しいお辞儀と共にその姿は去っていった。職員室には難しい顔をした教師だけが居た。

\* \* : : ; ; : : ; ; : : \* \* \* \* : : ; ; : : \* \* \* \* : : ; ; : : \* \* \* \* : : ; ; : : ; ; : ; ; ;

(…やばいな)

新一は感じていた。

職員室から出た後すぐに、軽い症状が訪れた。

一瞬真つ暗になる。気付いたときには目の前は床、など。そのまま倒れそうになることもある。

(ひどくなる前にかえんねーと…)

必死に足を動かし学校を出ようとする。

が—————

目の前に落ちてきたサッカーボール。

しまったと思ったときにはもう遅かった。

「あ！工藤！！！！」

飛んだボールをとりに来た後藤。  
俺に当てた奴。

「あつ！お前大丈夫か？入院してたって……」

「ああ、もう大丈夫だよ。良くなったし」

急いで体勢を立て直し普通を演じる。

「そうか！あ、本当にごめんな！このまえ当てちまって……」

「大丈夫だよ！気にすんな！」

話していると後藤を探しに中道が来た。  
そして中道が大声で皆に知らせってしまった。  
皆が俺を囲み、声をかける。

その間も俺には世界がまわって見えた。

困まれてたのから抜け出し、家に着いたのはもう夕方。  
疲れでそのまま倒れこんだ。

蘭に連絡するのは明日になるな、  
と思いながら瞼は閉じられた。

二十六話(後書き)

こんばんは(´・`・´)(ゞ

もう冬休み終わりですねー！ー！><  
宿題やってないんですがwww

次回は…うん。

蘭…かな？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3008y/>

---

未来へ

2012年1月6日00時51分発行